

浄土

monthly JODO

2019
September

9

法然上人讃仰会

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

貧乏骨董



ミャンマーの仏像といえば、派手な色使いのものが多く見られるが、この木彫の仏像は年月を経て色が剥げ落ちたのか、木肌が現れている

梅雨の晴間、東京・上野の不忍池骨董市をのぞきに行った。六張ほどのテントが並び、路上にも商品があふれている。外国人観光客が多い。薄暗いテントに入ると、奥の正面右手にこの仏像は立てかけられていた。左手は肩の先からなくなっている。鼻も左耳も欠けているし、両足とも足首から先がない。それでも優雅な身体のラインは十分に見取ることができる。日本の仏像とはあきらかに違う作りである。東南アジアあたりの仏像だろうか。

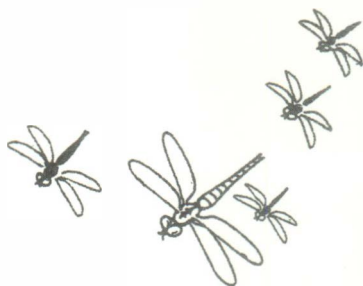
店番らしき女性に「これはどこの国の仏像だろう」と尋ねると「ミャンマーです、古いものらしいです」とのことである。ミャンマー（ビルマ）の仏像か、すると上座部仏教、小乗仏教に由来する仏像ということになる。ミャンマーの人口の九割は仏教徒である。仏教の国といってもさしつかえないだろう。だが、少数ではあるがイスラム教徒も存在し、仏教徒による少数民族ロヒンギヤへの迫害の報道もある。

仏像の丈は約一メートルほどである。優雅ではあるが失われた左手やその他の欠損部分が多く、まず痛ましさの感覚が押し寄せてくる。どういう運命でミャンマーからこの国にたどり着き、骨董市の薄暗いテントの中にいらっしやるのか。女性に「おいくらですか」と尋ねると、ちよつとお待ちくださいと言って店主に携帯電話をかけ、こちらを振り向いて「五万円です」との答えである。意外と安い。十万円は越すのではないかと予想していたから、安く感じたのだろう。だからと言って私に買える値段ではない。一万円でも手は出ない。ふと、十人くらいでお金を出し合って買ったかどうかと思うのだが、こういった仏像に興味をもっているのはみんな貧乏人ばかりである。それに買ったにしても安置する場所もない。あきらめるしかない。いや、安置することもないのかもしれない。この仏像は遠くミャンマーからおいでになり、この国の惨状をじっと見守っていらっしやるのかもしれない。

浄土

2019/9月号 目次

釈尊より法然へ①	頼住光子	2
聖阿上人とはどんな人	編集部	8
法然上人と親鸞聖人②④	林田康順	10
連載 微風吹動	石田一裕	16
連載 江戸の川を歩く③①	森 清鑑	20
連載小説 渡辺海旭⑩⑩	前田和男	26
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32
表2 貧乏骨董	三宅政吉	



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

釈尊より 法然へ

大乘仏教における浄土宗

法然上人鑽仰会 講演概録

1

東京大学教授

頼住光子

私自身、道元を中心として日本仏教の研究を進めてまいりました。その過程で、道元を禅仏教の僧侶であるとか、また曹洞宗の開祖であるとか、宗派という観点から見ただけではなくて、大乘仏教という広い視野から捉えていく必要があるのではないかと考えるようになりました。

そこから、日本の大乘仏教に関心が広がりまして、そのときに、いろいろな仏教者がいますが、たいへんに興味を持ったのが法然ということになります。法然につきましては、私自身、まだ勉強を始めたばかりで、非常に不十分な点があるかと思いますが、一つの新しい視点として、大乘仏教の思想が、特に「釈尊から法然へ」というように、実はこれは頂戴したお題ですけれども、そういう一筋の道が法然にまで続いているということで大変に僭越ながらお話ができたらと思っています。

さて、大乘仏教の思想家として法然を考えるために、いくつかの視点があるのではないかと思います。その場合、私自身がまず考えてみたいのは、浄土信仰そのものが、大乘仏教を含む仏教史の展開の中でどういう意味を持つのかということです。本講演では、仏教史の中で釈尊から大乘仏教へという展開を押さえた上で、法然の名著である『選択集』の内容について、その特徴的な教説を中心として、特に大乘仏教という観点を大事にしなからお話をしたいと思います。

法然に至るまでの浄土教の展開

仏教の中でも一番古い時代の仏教のことを初期仏教や原始仏教と呼んでおります。この時代、まだ浄土信仰という形では成立はしていないのですけれども、その前の段階と捉え

ることができないのではないかと思います。

まず初期仏教の出発点とも言えるのが、釈尊の菩提樹の下における開悟成道ということです。これは、言葉を超えた真理を体得したというように私自身としては押さえないと思います。そういう真理を体得した釈尊の体験が原点となって、この後仏教は展開していきます。その中に浄土教が起こって、広まっていくわけです。

さて、釈尊と同じく悟りを開いて、煩惱を滅却し、そして苦から解脱するために、初期教団の出家修行者たちは、釈尊にならって坐禅瞑想をし、非常に古い經典などによりますと、何人かの修行者は、悟りを、釈尊と同様に体得できたという伝えもございます。

その修行の一環として、特にここで見ていきたいのが、憶念——心に刻みつける、精神集中による記憶、想起、そういうものを含んでいる憶念です。六随念や十随念など、仏法、僧をはじめさまざまなものを念ずる修行方法が説かれていきました。この憶念がその後、展開して、後の世に念仏になっていったと言われております。

その後、部派仏教の時代になります。釈尊が亡くなられてから百年後ぐらいに、初期教団が分裂いたしましたして、そして諸部派が成立し、諸部派の中で学問修行が非常に盛んになっていき、その中で、引き続き憶念の修行も行われていたと言われています。

さらに先行する部派仏教に対する一つのアンチテーゼ、学問に特化していったそういう部派仏教のあり方に対して、もう一度、釈尊の原点に戻ろうということで、利他行を重視する大乘仏教というものが成立してまいります。これが大体、紀元前後と言われておりますけれども、その初期大乘仏教において浄土信仰が生まれたということです。

その浄土信仰の中では、一心に仏に心を集中し続けければ——集中し続けるというのは

samādhi」といって、これが念仏三昧、仏立三昧、般舟三昧と言われるものですけれども、過去・現在・未来の三世の諸仏を見る——見仏ができると言われます。さらにその仏を見て、自分が輪廻転生の間にこれまで重ねてきた罪を滅ぼし、滅罪し、仏国土に生まれることができるんだという信仰が非常に盛んになっていった。これが初期の浄土信仰ということになります。

ここで注目されるのが、仏に会う、仏を見るということが大きな意味を持っていたのだということ。釈尊は80歳で亡くなられたと伝えられていますけれども、80歳で亡くなられた後も、その釈尊は全くいなくなってしまうたのかというとそうではなくて、仏と会いたい、仏を実際に自分が体験したい、そういう思いが大乗仏教の中で非常に強く見られるようになります。それが一つには、例えば肉体を持った釈迦が亡くなったように見えるけれども、実は死んでいなくて、未来永劫、成仏し続けているのだという法華經の思想になります。さまざまな形で、80歳で釈迦が死んだのは、本当に死んだのではなくて、未来永劫に生き続けている、永遠に生き続けているのだという考え方が出てくるわけですが、その中で過去・現在・未来の諸仏を見るという考え方が発達していったと言うことができるかと思えます。

そして、平行して、仏国土思想というものが大乗仏教の中で盛んになってくる中で、特に阿弥陀仏に対する信仰、西方浄土への信仰が高まって、大体、紀元後1世紀ぐらいだと言われておりますけれども、数々の浄土經典が作られるようになったという流れがあるわけです。

先ほど申し上げました初期仏教から部派仏教、そして大乗仏教という展開の中で、特に

注目されるのが、釈尊から時間的・空間的に隔たるにつれて、次第に、修行による開悟成道、成仏の困難さというものが自覚されてきた。釈尊が生きていたら釈尊から直接にいろいろ教えてもらって修行することもできるけれども、目で見える、肉体としての釈尊と隔たってしまったことで、なかなか修行をして悟りを開くことが困難ではないかという自覚が出てきたということです。

このような成仏の困難さの自覚というところから、先ほど申し上げました多仏思想——諸仏と出会う、諸仏を実際に自分が見るというような、そうした信仰が盛んになって、そしてそこで見られる仏に対する帰依というものが唱導されるようになっていったということとを一つ、言うことができると思います。

大乘仏教を考える上では、いくつか重要なポイントがあるのではないかと思うのですけれども、この成仏の困難さの自覚、そこから仏に対する帰依というものが非常に高まってきたというのにも重要なポイントだと思います。また空——縁起の存在論を基盤とする利他の精神ということも重要なポイントになってくるかと思っています。

空——縁起の存在論

この空——縁起ということですが、これはきょうお話したい大乘仏教の思想家としての法然という問題に深くかかわってくる問題ですので、少し丁寧にお話ししておきたいと思います。

空といえますと、これは大乘仏教の非常に重要な思想ということとよく知られておりますけれども、その内実についてはなかなか理解が難しいところがございまして、空という

字面から、空っぽで何も無いと思われがちですけれども、決してそうではなくて、空というのは必ず縁起ということとセットにして考えるべき問題です。

縁起というのは何かといいますと、これは私自身の言葉ですけれども、関係の成立と言っているのではないかと思います。関係の成立というのは、あるものが存在するときに、それはそのものとして独立してあるのではなくて、必ずほかのものととの関係の中でそのものがそのものとして成り立っているという考え方です。そのものとして独立してあるものではないということは無自性と言います。自性といいますのは、サンスクリットでいうとアトマンということになりました。永遠不滅の本質や実体と言われているものです。そういうものはないのだというのが仏教の考え方です。永遠不滅の本質はないのだけれども、でも、そこに確かにものがある。では、どうしてこういう形であるのかというと、それは関係の中であるということです。だから、関係が変わればどんなそのもの自身も変わっていくということです。

(つづく)

頼住光子／よりすみみつき

1991年東京大学大学院人文科学研究科修了。博士（文学）。

山口大学、お茶の水女子大学を経て、2013年東京大学人文社会系研究科倫理学専門分野教授に就任。

著書

『道元自己・時間・世界はどのように成立するのか』日本放送出版協会シリーズ・哲学のエッセンス、2005

『日本の仏教思想 原文で読む仏教入門』北樹出版、2010

『道元の思想 大乘仏教の真髄を読み解く』NHKブックス、2011

『正法眼蔵入門』（角川ソフィア文庫）2014

『ざとりと日本人：食・武・和・徳・行』ぶねうま舎、2017

浄土宗第七祖 聖岡上人
六〇〇回ご遠忌によせて



聖岡上人

とは

どんな人？

浄土宗七祖・西蓮社丁譽聖岡上人は、暦応四年（一三四一）正月二十五日に佐竹氏一族として、常陸国久慈郡岩瀬（現在の茨城県常陸大宮市）お生まれになりました。

一三四一年といえはまだ時代は南北朝に入っただけのころで、足利尊氏が活躍していた時代です。常陸国も戦乱が続いていたことでしょう。聖岡さんのお父さんが八歳の時に戦死してしまい、聖岡さんは瓜連の常福寺に預けられ、常福寺の開山上人であった了実上人（浄土宗の第六祖）のもと出家得度され、修行に励みました。

その頃の浄土宗は、宗として教えが教学的に体系化されておらず、また弟子に教えを伝える制度もなく、他の宗から「寓宗」と辛らつに批判されておりました。特に臨済宗を中心とする禅宗からの批判は痛烈で、大乘の説でないと言われていました。

聖岡上人は、浄土宗の教えのみならず、二十五歳から十二年もの間諸国を巡り、俱舎、

唯識、天台、真言、禪、神道、儒教、和歌などをそれぞれ師について学び、その上で浄土宗の教えの優位性を示すため、特に禪宗に対抗する教義を打ち立てるために努力しました。

膨大な数の著書を著し、浄土宗の教えを「二藏二教二頓教判」という形で整理し、浄土宗を浄土門、以外を聖道門としてはっきりと判別しました。

又、弟子の養成に心がけ、戒脈として円頓戒を、宗脈としては五重に整理し、それぞれの教書を定め、又それぞれに解説書をお書きになりました。この頃には後に増上寺の開山上人に成られた聖聡が弟子入り（一三八三年）をしています。そして生涯大勢のお弟子を育てています。

ですから聖岡上人の主な仕事は、浄土宗の教えを整理し、独自の教相判釈をして浄土宗の教えの優位性を世間に示したこと、弟子を育てることを制度化し、その道筋を作ったことで、当時他宗から寓宗として相手にさ

れていなかった浄土宗を、天下に誇る宗派に格上げし、あまたの城主から認められるようになったことと言えるでしょう。まさにその意味で、浄土宗中興の祖と讃えられているのです。

一三八六年に瓜連にもどり、常福寺の第二世となっています。しかし一三八八年には瓜連町の大火で常福寺は焼失しました。聖岡さんは四十五歳でした。そして一四〇三年に浄福寺を再建するも、一四一六年上杉禅秀の乱が起こり、瓜連は「しかのふしど」となり、聖岡上人も命からがら阿弥陀山の洞窟に遁れました。干し柿で飢えをしのいだと言われています。このとき聖岡上人は七十五歳でした。その後間もなく弟子の聖聡上人の招きで、江戸小石川に庵を結び、そこで一四二〇年九月二七日八〇歳の生涯を閉じられました。この庵は現在、傳通院となっています。

（編集部・長谷川岱潤）

法然上人 と 親鸞聖人

【連載二十四】

望月信亨先生による
ご指摘②

林田 康順

(大正大学教授)

浄土伝統の教えの混乱

前号では、仏教学・浄土学の泰斗である望月信亨先生による法然門下の教えに対する説示の中、源信僧都に仮託された、いくつかの著作からの影響を中心に紹介してきました。今号は、その続きです。

けれど本覚法門は従因向果の行修をすべて迹門始覚しやもんの法となし、遇教の時、即座に平等大会に住すと説き、実践実行を無視するのであるから、天台宗学の伝統的立場からいえば無論異端の説である。

つまり、本覚思想では、行を修めるという〈因〉から覚りを得るという〈果〉への方向をもつ始覚法門をレベルの低い教えと位置づけて、それを軽んじる一方、本覚法門に出会ったならば、直ちにこの上ない覚りの境地に辿り着くというのです。そして、実践や実行を

輕視することから、天台宗学の伝統的立場からみても本覚思想は異端の説であるということです。前号で述べたように本覚思想は、天台宗総本山である比叡山を中心に成立・展開したので、天台本覚思想と呼び慣わしていますが、天台宗の教えが行を輕んじているわけでは決してありません。すなわち、高祖・天台大師智顗は『摩訶止観』の中で常行三昧・常座三昧などの四種三昧を提唱し、その中で十乘觀法等の行の実践を展開しておられます。その上で、一念三千・十界互具・諸法実相を説いておられるわけですから、行を輕んずるということはありません。したがって、天台宗の正統な理解からいっても、本覚思想は異端の説と指摘できるのです。

これを淨土門に取り入れた結果もまた同様であって、聞信領解を唯一の要件としたところから、無修無行の弊風を生じ、また即解即証を建前としたので、淨土往生の法は一変して即身成仏宗となり、

ここでいう「聞信領解」とは、真宗でいう「聞法」であり、西山派でいう「領解」を念頭においたものでしょう。本連載において既述のように、親鸞聖人は、阿弥陀仏による大信を賜った時点で「現生正定聚」^{げんしょうじやうていしゆ}、すなわち不退転の境地に至ると主張します。もちろん衆生が行を修める必要はありません。さらに親鸞聖人は、『教行信証』信文類において、真実信心の徳として「もろもろの如來と等し」（真宗聖典二三七）という『華嚴經』の一節を引用し、さらに『御消息』の中ではその一節を解釈して「信心よろこぶひとはもろもろの如來とひとし」（真宗聖典七五九）と述べられています。ここで親鸞聖人がいう「如來と等し」と望月先生が指摘する「即身成仏」とは厳密には同じではないかもしれませんが、その方向は共通しています。一方で法然上人は、「釈尊在世の時すら、即身成仏にお

きては龍女のほかいとありがたし（釈尊がいらっしやった時代ですら、この身このままで仏となったのは『法華經』に説かれる龍女以外にはおりません）」（『念仏大意』昭法全四〇六頁）とお示しです。法然上人当時、多くの僧侶が即身成仏を目指して行を修めておられました。しかし、法然上人の透徹した人間観によれば、即身成仏を遂げた者など、ただの一人もいなかったのであり、こうした立場の堅持こそ法然上人による凡夫の自覚に他ならないのです。

のみならず十勸正覚の本願成就の如来は迹門の弥陀としてこれを却け、觀經真身觀の弥陀は方便化身、九品淨土は方便化土としてこれを貶し、善導、法然らが往生の正因として自らも修し、他にも修せしめた称名念仏の法はこれを自力の行として排斥し、淨土伝統の教旨はために大いに惑乱さるるに至ったのである。

ここでは、『無量壽經』に説かれる「十勸正覚」の報身阿弥陀仏は、法身阿弥陀仏に比べれば一段劣る「迹門の弥陀」として退けられ、『觀無量壽經』「第九・真身觀」に説かれる阿弥陀仏や莊嚴された場として描かれる極樂淨土を「方便化身・方便化身土」として蔑視していると指摘されます。そして、善導大師や法然上人が淨土往生の正定業と位置づけて自ら修め、他にも勧められたお念仏を自力の行として斥けてしまったため、法然上人の教えが大いに混乱してしまったと指摘されます。この点についても既述してきたように、お念仏の相統を軽んずるのは、日課六万遍、晩年は七万遍を勤められた法然上人の姿の輕視とも言えるでしょう。すでに念仏相統を軽んずる教えに対して法然上人は一連の「一念義停止起請文」の中で「獅子身中の虫・付仏法の外道」などと厳しく戒められ、あるいは、二祖聖光上人は『末代念仏授手印』の中で「邪義・邪説」と指弾されたのは周知のことで

す。日課六万遍を相續しておられた法然上人のお姿をご覧になったからこそ聖光上人は、ご自身も日課六万遍の日暮らしを送られ、さらに、その師の姿を拝された良忠上人も日課六万遍の日々を過ごされました。こうした聖光上人や良忠上人による受けとめ方こそ、法然上人の教えを尊ぶ私達がいたくべき姿勢に他ならないでしょう。

還我頂礼心諸仏——自身の心中にまします諸仏を礼拝する——

続けて望月先生は、直接、親鸞聖人の理解に言及されます。

また親鸞らが安心業成の後、仏恩報謝の行として、念仏または諸善を修すべきことを説いてきたのは、『枕双紙』に遇教の時、すなわち証す、万行万善は果後の方便なり、というのに基づいたものかも知れぬが、本願成就の迹門の弥陀であれば、仏恩報謝の義も成り立つけれど、それを本門の弥陀とする時、我れら自身と団体であるから、その名号を唱えることはいわゆる還我頂礼心諸仏で、すなわち我れら自身の本名を喚ぶことになり、報恩の語は無意味とならなければならぬ。

つまり、親鸞聖人が、信心確立後の報恩感謝のお念仏を説いたのは、源信に仮託された本覚思想文献である『枕双紙』に「本覚法門に出会ひ、その場で覚つたならば、あらゆる修行は方便となる」という説示からの影響であると指摘されます。その際、修行を経て、今から十劫前に成仏を遂げた報身であれば、煩惱具足の私達を救つて下さる阿弥陀仏に対して「お救い下さつてありがとうございます」という報恩感謝のお念仏という教えも成り立つと指摘されます。『一紙小消息』の中で法然上人も、「天に仰ぎ地に臥して悦ぶべし、このたび弥陀の本願にあう事を。行住坐臥にも報ずべし、かの仏の恩徳を」（昭法全

四九九」と歎喜踊躍の心と報恩感謝の心に言及しておられ、そうした心持ちで称えるお念仏を勧めこそすれ、否定的な姿勢を示されることは決してありません。しかし、法然上人がお示しになったかったのは、「凡夫の心は脆弱であり、歎喜踊躍や報恩感謝の心持ちは決して長続きするものではない。(助けたまえ)」という思いこそ基本となろう」ということです。理想的なあるべき姿に拘泥することなく、現実存在としての私達自身のありのままの姿を強調されたと受け取れます。だからこそ法然上人は、「ただ一向に念仏すべし」とお念仏を手放さない日暮らしを私達に訴えられたのです。その上で、親鸞聖人のように、阿弥陀仏を本門の弥陀として位置づけてしまったならば、その名号を称えることは私達自身の本名を喚ぶことに他ならないとお示しです。なるほど、本門の弥陀、久遠実成の弥陀、親鸞聖人がいう「自然のやうを知らせんれう」としての法身を存在根拠とする弥陀であれば、その働きは絶対的・普遍的なものであり、私達自身にもその働きは等しく及んでいることとなります。したがって、「南無阿弥陀仏」と称えるお念仏は、究極的には私達自身の存在根拠を呼ぶこととなり、報恩感謝という言葉は無意味となるとおっしゃるのです。とにかく幸西らは本覚思想を基調とし、諸祖の文献およびその行蹟の炳焉へいえんたるものあるにかかわらず、すべてそれに対して目を掩い、あるいは文を廻らし訓を転じてもつてその義立に付会し、ここに浄土宗義は異様な発展をみるに至ったのである。

ここで望月先生が指摘される「文を廻らし訓を転じて」について、一例として『無量寿経』巻下に説示されている第十八・念仏往生願の成就文を取り上げてみましょう。まず法然上人は「あらゆる衆生、その名号を聞いて信心歓喜して、乃至一念至心に回向して、彼の国に生ぜんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す」(『選択集』第三章段、浄土

宗聖典三・二二）と、お念仏を称えることをはじめ、私達衆生が主格となつて信を具え、行を修めることを促しておられるのに対し、親鸞聖人は「あらゆる衆生、その名号を聞き、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまへり。かの国に生ぜんと願ぜば、すなはち往生を得、不退転に住せん」（『教行信証』信文類、真宗聖典二二二）と、あくまでも仏による回向を強調し、衆生が主格となる当為を最小限に留めようとされるのです。こうした親鸞聖人による独自の読み方は、『教行信証』はもとより、他の文献にも多く見られるところです。

以上が望月先生による説示です。その細部については、多くの研究者がさまざまに自説を披瀝されてはいるものの、卓越した慧眼に基づく全体的構図は今も高く評価されています。もちろん、古来、真宗学の中では、望月先生による指摘のままに捉えることは決しないことも理解しておかねばなりません。

いずれにしても、中古天台の本覚思想に翻弄されて、「念仏を相続する教えは、阿弥陀仏の本願力を疑っているものである」などと受けとめてしまった一部の法然上人の門弟が輩出しました。そして、そうした流れは必然的に行の軽視・信の強調という果てしなき螺旋の渦に巻き込まれ、いつしか行を修める主体ばかりか、信を発す主体までも見失ってしまうこととなります。その結果、親鸞聖人が「至心に回向したまへり」と訓を転じたように三心を発す主体を凡夫の側から阿弥陀仏の側へと移行するなど、最終的には（娑婆と浄土）あるいは（凡夫と仏）の隔絶という法然上人が主唱した相対的・二元論の世界観を放棄して、絶対的・一元論の世界観へ埋没するという事態を招くこととなるのです。

（続く）

石田 一裕

平成最後のお彼岸

悲しいから泣くのはあたりまえで、
ほんとうに泣くのは、
嬉しくて泣く時ですよ。

豊島与志雄『死の前後』



微

風

吹

動

今年の春のお彼岸は平成最後のお彼岸であった。その頃は、まだ新しい元号は発表されていなく、一つの時代の終わる感慨と、新たな時代への期待が入り混じり、三寒四温の季節にそれが妙にしっかりとくるものがあつた。

そんな中、私はお彼岸に合わせてお仏壇参りを行っていた。近隣のお檀家さんの家のお仏壇にお経をあげ、お茶を飲みながら言葉を交わすのである。話題は天気のこと、家族のこと、最近あつたちょっとした出来事など、他愛もないことである。もちろん「平成最後」で話にも花が咲いた。

三十一年続いた平成、長い月日である。子供が大人となり、街並みが変わるのに十分な時間だ。その最後に、思い出を語り合うことは、新たな時代を歩む準備だったのかもしれない。

その日は午前中の雨と寒さが午後になって和らぎ、穏やかな春の日差しは桜のつぼみを照らし出した。頬に当たる風も少し暖かく、それを受けながら自転車でお檀家さんの家を巡っていた。

目的の家に着き、室内に通され、お仏壇の前に座る。ろうそくを灯し、線香に火をつける。一呼吸置いて、鈴を鳴らし、読経を始める。お仏壇の奥の御本尊を見つめていると、脇のお位牌に目が留まつた。平成元年に亡くなった、その家のおじいちゃんのものであった。

「おじいちゃん、亡くなったの平成元年でしたね」

読経が終わり、お茶に口をつけてから、そう発した。すると、奥さんが、亡くなった義父の晩年について話し始めてくれた。

元警察官だったおじいちゃんは、退職後、認知症になったそうだった。ある時、おじいちゃんがお墓参りに行ったまま帰ってこないことがあった。お墓から帰宅する道がわからなくなってしまったのだ。しかし、警察官として鍛えた健脚でおじいちゃんは歩き続けた。家を探して歩き続け、けれども、見当違いの方に向かってしまう。その歩みはとどまることなく、高速道路に迷い込み、さらにかんりの距離を進み、道路警備をしていた車に保護され、警察に送り届けられた。そこから家族に連絡が入り、無事に迎えにいくことができたということがあったそうだ。

以前から、おじいちゃんは度々、交番に保護されていた。家族も心配で、よく着るジャンパーの後ろに、連絡先や氏名を書いたタグを縫い付ける事にした。それが幸いして、連絡が届くのである。おじいちゃんはそのタグを見つけたことがあった。その時には、心に刻まれた警察官としての誇りからか、困っている人を保護する自分に、こういうものをつけるとは何事だと、ひどく怒ったという。

近所で火事が起きた時には、率先して道路に立ち、消防車や救急

車などの交通整備を一生懸命したこともあった。長年、警察官として歩んだことで、亡くなるまで正義感に満ちた行動をとることができたのだ。

そんな話を奥さんは笑いながらしてくれた。本当に楽しそうに、當時を振り返りながら、笑みを絶やさずに、思い出を語ってくれた。それは、もちろん、苦勞話である。當時は、家族みんなが困惑したり、悲しくなったり、大変な思いをしたいに違いあるまい。それが三十年の月日を経て、笑って話すことのできる思い出になったのだ。話がひと段落して、そろそろお暇をしようと思っていると、奥さんは「今日はおじいちゃんの話をお久しぶりにできて嬉しかった」と笑顔で言った。その目尻は、涙で濡れていた。その穏やかな顔で私のことを見送ってくれた。

嬉しくて流す涙がある。誰かを思い出して流すそんな涙は、その人への思いを胸に、時間をかけて供養の道を歩んできた証だろう。その歩みと、その道で得た思いは、とても清らかで、夕日のはるか向こうに旅立ったその人にまで伝わっている。そして、自分自身を支えている。秋彼岸、私も大切な人のことを誰かに語ってみよう。

江戸の川 を歩く

第三十二回

江戸ウォーカー

森清鑑

江戸川(利根川)「2」

行徳から市川へ

行徳河岸を右に見て江戸川を北上。すると右岸に常夜灯が立っている。これは運行の舟に位置を知らせる常夜灯である(現在も残っている)。この辺りから行徳の寺町が始まる。「行徳は戸数千軒、寺百軒」。その位、寺が多かった。常夜灯を右に行くとすぐ行徳街道にぶつかる。この街道の東側から北に向かって寺町が広がる。本行徳八幡、本久寺、浄閑寺、圓頓寺、妙覚寺、法善寺、法泉寺、常運寺、長松寺等。そして徳願寺に着く。一際、広大な寺域を持つ、この寺は、家康の帰依を受け、秀忠から運慶作の阿弥陀如来像(本尊)を、家光から朱印を与えられた名利。寺町を代表する浄土宗の寺であった。この寺は又、剣豪宮本武蔵が逗留し、近くで養子、伊織と巡り会った処と伝

えられ、寺内に武蔵の供養塔が建てられている。雪旦はこの辺りの風景を克明に描いている。寺町通りから参道に入ると中規模だが堂々とした山門があり、潜って参道を進むと、右に鐘楼、左に閻魔堂があり、正面に本堂がある。ここに運慶作と伝えられる本尊阿弥陀如来像が鎮座。そして本堂の右側に長廊下があり、方丈に繋がっている。寺域の周囲は立木で仕切られ、霊場の雰囲気を感じている。寺域正面の道を「寺町通り」と言い、大勢の人が行き交っている。

この道を左方向、すなわち江戸川に向かって歩く。隣の妙応寺を越すと、すぐ左に入る道。これが「権現道」である。家康が鷹狩りに来たとき通った道を記念して処の人はこう呼んだ。これをやり過として寺町通りを直進すると、すぐ江戸川沿いに、平行に走る行徳街道にぶつかる。ここはもう、馬に乗る人、籠に乗る人、大勢の人々が行き交っている。街道の両側には家宅が並ぶ。行徳の繁栄を象徴する主道である。これをつつ切ると、江戸川沿いにある大徳寺が見えてくる。雪旦の絵はこ

江戸川(利根川)
行徳から市川へ

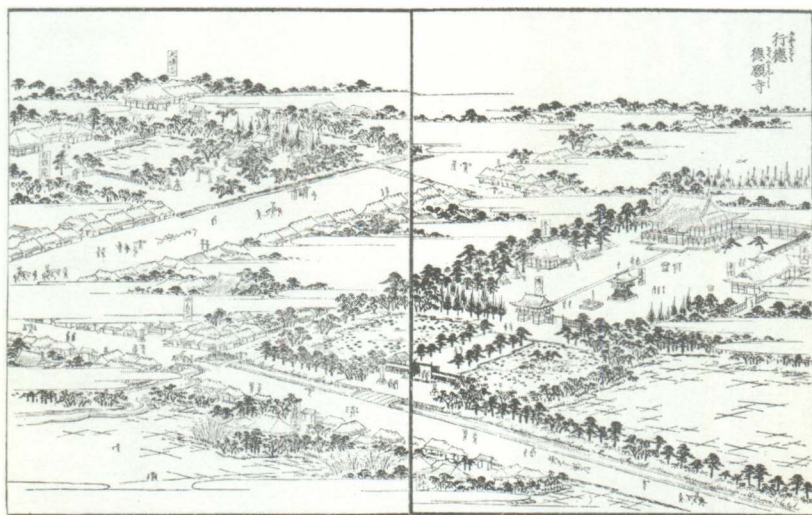


こまでだが、その後ろに江戸川が滔々と流れているのである。しかし、この辺りの、寺町の風景を見事に描写している。

いちかわのしゆく

市川宿、佐倉街道

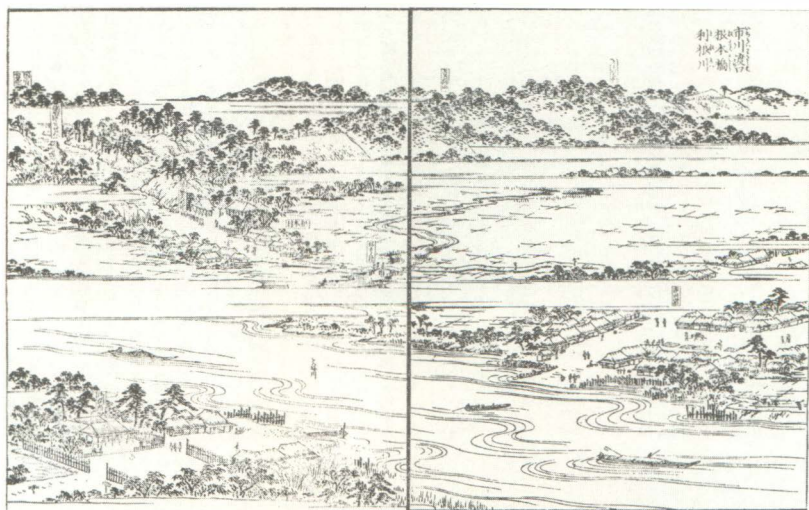
江戸川（利根川）は篠崎を過ぎると縦に蛇行しながら進む。多くの運搬船がひっきりなしに航行している。左を見ると篠崎街道が川に沿って北へ。やがて右側、行徳から市川村に入る。すると佐倉街道（現、千葉街道）にぶつかる。江戸時代は無論、橋は無く、渡し船。対岸の小岩と市川の双方に関所があり、荷物検査ばかりか、「入り鉄砲に出女」のチェックが行われる。なにしろ、江戸と下総のいわば国境であつたから検査は厳重である。とはいえ、江戸後期には、成田山新勝寺詣での客で賑わつたから、随分と手早く検査が行われた。小岩から渡し船に乗り、利根川を突つ切ると、市川宿。渡ると右側に関所。そこから道の両側にずらりと宿が並ぶ。当時は四十―五十軒の宿があつ



江戸名所図会：雪旦：「行徳願寺」：右、徳願寺、その前、寺町通り、左、行徳街道

たという。この佐倉街道を東へ直進すると、やがて佐倉に着く。佐倉は歴代江戸幕府の重臣が治め、幕末は老中、堀田備前守。幕府の分割統治区のようなもの。佐倉城は格式高く、威厳を持っていた。相撲の雷電為衛門も晩年、佐倉に住む。佐倉からさらに東へ。すると、成田山新勝寺に着く。従って佐倉街道は別名、成田街道と言われていた。

雪旦は江戸名所図会に市川宿と渡し場の場を克明に描いている。絵の下に利根川（江戸川）が滔々と流れている。左に小岩の関所と舟乗り場。渡し船が対岸の市川宿に向かっている。利根川には荷船が運航している。市川の船着き場には柵が巡らされ、右側に関所があるようだ。そして、佐倉街道の両側に宿や料理屋が密集している。市川宿の繁栄ぶりが目に見えるようである。絵の中央は雲で仕切られ、その先に田園の中を蛇行し、江戸川に注ぐ川が描かれている。これが真間川である。そこは根本村。根本橋が架かっている。利根川（江戸川）沿いに迫り上がっていく丘の道がある。その頂点が鴻之台（国府台）である。



雪旦：江戸名所図会：「市川渡し口、根本橋、利根川」の図：渡し、市川宿、真間川、左上に鴻之台が描かれている。

真間の継ぎ橋ま ま

江戸川から真間川をちよつと内陸に入つた処の絶景を描写した有名な絵が広重の「真間の紅葉、手古那の社、継ぎ橋」である。江戸期、真間川のこの辺り一帯は蘆や茅が生えた砂州。砂州と砂州の間に川が流れており、そこに架かる橋を「継ぎ橋」といった。絶景である。それを紅葉で有名な弘法寺の境内から見下ろした図がこれである。弘法寺の歴史は古く、行基に始まり、天台宗から鎌倉時代日蓮宗に。家康は三十石を与え、光圀は茶室に号を与えた。格式の高い寺社で紅葉の名所であった。川の周辺に茅葺き屋根の民家が建ち、木々と田園、水の青さが溶け合う見事な自然風景。手古那の社は、絵の下左にある小さな社で昔、手古那という名の美しい女性が男に言い寄られてここに身を投げたという伝説があり、彼女を弔う社である。遠くに見える山は筑波山。となると、弘法寺の位置が異なる。弘法寺は真間川の北に在りその

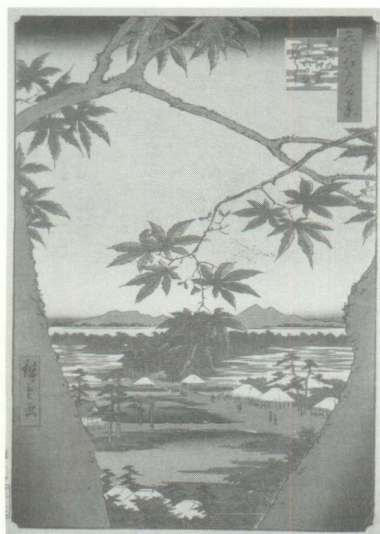
正面の景色は行徳、江戸湾の方だ。しかし、弘法寺の紅葉を強調し、真間の州を眼下に見下ろし、正面遠方に筑波の山々を配置する、広重一流の構図で、当時の景色を見事に表現したわけである。

さて真間川に架かる根本橋を渡つて、江戸川（利根川）沿いに丘を登って行こう。丘道の左眼下には利根川が悠々と蛇行している。そしてこの丘陵の頂点が鴻之台（国府台）である。

【参考資料】

角川書店「江戸名所図会」

国会図書館…広重「名所江戸百景」



広重：真間の紅葉、手古那の社、継ぎ橋

小説
快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第一〇〇回

第三部

充実と稔りの白秋へ

◇御代替わり◇と「三教会同」 その一



なぜ海旭は、今浦島にならなかったのか？

故国を長く留守にして帰国すると、多くの人は、はげしい。浦島太郎シヨックに襲われる。あらゆる事象が目新しく、自分は現世から取り残されたのではないかという深い孤立感にさいなまれる。

インターネットで瞬時に情報にアクセスできる現代とちがって、日本から欧州の諸都市にまで文物が届くのに船便で一か月も二か月もかかった明治時代にあつては、その不在が長きに及べば及ぶほど浦島太郎シヨックは尋常ならざるものになつても不思議ではない。

ところが、不在が足かけ十一年もの長さわたつた渡辺海旭は、一瞬たりとも今浦島にはならなかつた。それどころか、帰国するなり、名利・深川西光寺住職に復帰、宗門の機関紙「浄土教報」の主筆として健筆をふるうかたわら、宗教大学で最新の学究精華を講じ、法然上人七百年遠忌記念事業の「目玉」として仏教界初という歴史的な窮民救済事業

「浄土宗労働共済会」を立ち上げ、さらに一般の子弟にも門戸が開かれることになつた母校の芝中学の校長を引き受けるなど、まさに八面六臂・大車輪の活躍ぶりで、周開を大いに驚かせた。

しかし、いくら生来才気煥発であつても、十一年も故国から離れていては、その変貌ぶりに戸惑い、立ち止まり、なにをどうしていいのかしばし逡巡するはずである。それなのに、再起動のための充電待機もなしにいきなり走りだした。それも全力で。おそらく周開は摩訶不思議でならなかつたことだろう。

なぜそんなことが可能だったのか？ 筆者の妄想するところ、それは、海旭にとつて帰国して目の当たりにしたあらゆる事象が目新しいどころか、すでに見慣れたものだったからではないか。実は異教の地の十一年間で、はからずも時代の先を読み解く羅針盤を手に入れていたからではなからうか。

海旭がドイツへ留学した明治三十三年（一九〇〇）は、当地ではすでに鉄血宰相ビスマル

クが失脚、ヴィルヘルム二世の親政がはじまつて十年が経過。御代替わりによって政治・経済・文化、そして宗教にいたる社会全般が目新しくなっていくのを身をもって体感。そして帰国した翌年、折しも故国でも明治から大正への御代替わりに遭遇するのである。

日本は国民国家として近代化をめざしていたが、それはドイツ帝国に半世紀ほど遅れていた。ということは、海旭が帰国して遭遇することになった新しい日本の事象の大半は、すでにドイツおよびドイツ国民が経験していたことであつた。

たとえば、海旭が帰国直後に起きた大逆事件である。留学中は社会主義者たちと交わるなかで、ビスマルク時代の「社会主義鎮圧法」による冬の時代の話をさんざん聞かされた。大逆事件で、海旭が日本にもこれで「社会主義の冬の時代」が間違ひなくやって来るとの既視感を抱いたとしても不思議ではない。すでに紙幅を費やして述べたように、ドイツ留学時代は社会主義に親近感を抱いていた海

旭だったが、日本においては社会主義者とは一線を画して仏教独自の社会事業をおこすべきだと判断し、即実践に移したのも、おそらくその既視感からだったと思われる。

神仏基三教が「皇運扶翼」を決議

もうひとつ、故国の御代替わりが内在させていた歴史的事を、海旭がある予感をもって受け止めた「重大事件」がある。

「三教会同」である。

それは、日本の宗教界、とりわけ仏教界にとつてその存在価値を問われたという点で、四十年前も前海旭が生まれた年に仏教界を震撼させた「廃仏毀釈」と地続きの重大案件であつた。

まずは「三教会同」とはなにか、簡単に素描しておこう。

明治四十五年（一九一二）二月、当時内務次官であつた床次竹二郎が、教派神道、仏教、キリスト教の「神仏基三教」の代表者を華族会館に招き、一堂に会させた。教派神道では

黒住教、天理教などから十三名、仏教では浄土真宗大谷派をのぞく有力宗門から五十一名、キリスト教ではプロテスタント諸派とカトリック、ロシア正教から七名がこれに応じ、政府側からは、後に「平民宰相」となる内務大臣・原敬を筆頭に、司法、海軍、通信大臣ら赫々たる要路二十一名が出席した。

その狙いとするところは、以下の決議文に明快に語られている。

「われらは各々その教義を発揮し皇運を扶翼し、ますます国民道德の振興を図らんことを期す」

突然、政治の世界から投げかけられた「三教会同」は、当然ながら宗教界に大きな波紋と議論をまきおこした。もちろん海旭にとっても「他人事」ではなかった。

大逆事件が海旭に彼の地での「社会主義弾圧」を思い起こさせたように、「三教会同」はビスマルクとその後のヴィルヘルム二世治下のドイツで繰り返された宗教（とりわけカトリック教会）への政治介入を想起させたとし

ても不思議はなかった。

政府は「遼東の象」

宗門の機関紙の主筆として、これをどう評すべきか。あれこれ悩んでいるところへ旧知の高島米峰がやってきた。ドイツ留学前、宗派を超えて仏教を革新していこうと参加した新仏教同志会の立ち上げメンバーで、同会機関紙「新仏教」の編集長でもあった。米峰は時候の挨拶もそこそここう切り出した。

「宗教界のみならず世間の議論を沸騰させている例の三教会同だが、欽定憲法の『信教の自由』を脅かすものだから断固反対だ。おれは、『新仏教』でその論陣を張るつもりだ。おぬしもぜひ応援してくれ」

「そ、それも一つの立場だが、僕は『浄土教報』でこう論評しようと思う」

そう海旭は返すと、次号の宗門の機関紙の巻頭を飾る長文の草案を米峰に手渡した。

さっそく原稿に目を走らせた米峰は、中途で顔を上げると、驚嘆の声を上げた。

「なに、遼東の豕^しだど！ 今回の政府要路の宗教界への工作をここまでこきおろせるとは、おぬしの度胸と筆の切れ味には、いやはや恐れ入った」

読み終えると、米峰は言った。

「政府がこんなことを偉そうにやる前に、もっと宗教のことを勉強しろ、ときたか。欽定憲法違反というおれの論法が正攻法なら、おぬしのはさしずめ搦手攻めだ。こいつは楽しみだ。宗門はもちろん、三教家どもがどう反応するか。そしてなによりお上がどう反応するか」

と言いくくと、高島米峰は共に戦う同志を得たことに満足しながら帰っていった。

しかし、海旭の心中にはあるわだかまりと予感が生じていた。なぜこの時期に時の政府は抵抗や批判を覚悟してまでこんな大仕掛けを企てたのだろうか。この裏にはなにか重大な事案が隠されているのではないか？ そしてその予感はいまだ半年後に御代替わりが起きたことでの的中する。

実は、このとき明治天皇は体調がすぐれず、歩行に困難をきたすようになっていた。また、糖尿病の悪化から睡魔に襲われ枢密院会議の最中に寝てしまうことがあり、側近に「朕が死んだら世の中はどうなるのか」と弱音を吐いていて周囲を心配させていた。明治天皇をいただいて御一新を断行、明治という国家体制を築き上げた元老たちにとっては、シンボルの早すぎる崩御は明治国家の崩壊の危険を意味していた。

おそらく政界風見鶏と呼ばれ、後に政友会の首相候補にも目される床次竹二郎は、それを付度し、明治天皇がみまかつても国体が安泰であるようにと乾坤一擲の工作を仕掛けたのであろう。

これに海旭は宗教家として社会事業家としてどう向き合うのか。紙幅が尽きたのでそれは次号に譲ろう。

(つづく)

さっちゃんね

かまち♡よろう



編集後記

わが夏のいのち短し蟬時雨

岱潤

驚きの一試合があった。高校野球岩手大会の決勝戦である。時速一六三キロの剛速球投手佐々木朗希君を擁して勝ち進んできた大船渡高校が花巻東高校との決勝戦に、そのエースを登板させることなく敗北したのである。監督は前日の準決勝で一二〇球。それまでの三試合での積算投球数を考慮して、故障を防ぐための選択だったと説明した、勇気ある決断である。

予想通り、その日のうちに二百を超える苦情、脅迫が学校に寄せられた。プロ野球OBの解説者も、考えられないと監

督を批判した。しかし大リーガーのダルビッシュ投手は一二〇球投げた投手が、次の試合を休むのは常識的に当たり前だと言つて、監督を正しいとした。

そしてこの監督の決断は高野連を動かした。甲子園大会準決勝の前日は以前から空日になっていたが、今年から決勝の前日も空日となった。三人も四人も投手をかかえているチームはいざ知らず、一人の投手で勝ち進んできたチームへの配慮といえそう。いままで、高校野球だけで消えていった選手は多い。大船渡高校の監督が二石を投じたことは間違いない。何事も長く続けてゆくには、緊張と緩和のバランスをとる「いい加減」という

発想が大事なのである、と仏典にある。強制される働き方改革ではなく、自身で考えて行う「いい加減」な生き方がいいな、と考える夏である。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

八十五巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和元年八月二十日

発行 令和元年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 加藤昌純

印刷所 株式会社 晴印刷

〒一〇五〇〇二一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七

FAX 〇三三五七八六〇三六

振替 〇二八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌純(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉祥寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松清泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 価額:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三幸請)、関西版(四幸請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

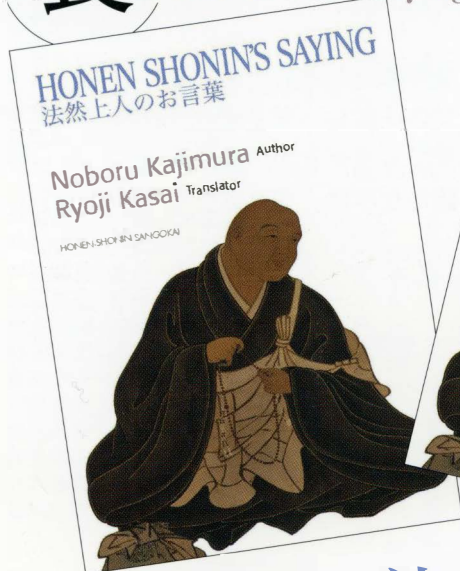
※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は価額に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying



表

右開きで和文の
ご法語



和英対応 法然上人のお言葉

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。